

昭和十年五月廿三日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）
昭和二十八年四月廿五日印刷
昭和二十八年六月一日發行

第十九卷 六月號

淨

土



道久

六月號

老の聖訓

あゝ短き人の生命よ、百歳に達せず死す、たといそれ以上生くるも又老の爲に死す。

物をおのれの所有とすることから人に憂あり、永久に所有せらるべきものあらじ、この世にあるは離るべきもののみ、かく知りて家に住むことなかれ。

すべて我が所有なりと思うものは死によつて捨てさられる、この患を見て、我が賢き弟子は自己所有主義におち入ることなかれ。

たとえば夢の中に會える人は目覺めたる人が見ざるが如く、憂せられたる人なりとも死して逝ける人を見ず。

何の誰という名の人がかつては見られ、又は聞かれても、人死すればただ呼ばるべき名のみ残る。

自己の所有を貪愛する人は憂悲追惜を捨つること能わず、故に智者は所有することなく安穩を證つて世を渡る。
(スッタニパーター最古のお經より)

浄土 六月號 目次

椿の花……………吉田絃二郎(1)

一枚起請文……………佐藤賢順(12)

世法と佛法……………竹中信常(6)

古寺訪問 金勝の阿彌陀寺……………新保義道(16)

學校訪問 家政學園……………編輯部(22)

商賣と信仰 二度目の求道……………中野尅子(18)

隨筆 ベーテ博士に想ふ……………藤田寛海(10)

童話 お池のお念佛……………森正義(24)

新興宗教訪問記……………編輯部(26)

讀者のページ(一)……………(9) 短歌……………(21)

讀者のページ(二)……………(表三) 芝園だより……………(表三)

時評……………(4) 挿畫……………松濤達文



椿 の 花

吉田 絃二郎

今日このころは椿のさかりである。

椿は京都がいゝやうに思ふ。法然院に詣でたのは椿の花のさかりのころであつた。知恩院の細井さんにつれて塵一つない法然院の聖淨境に入つて、本堂の二十五菩薩に供へられた二十五の椿の花の山を床の上に見出した時、宗教の幽玄と藝術の美の渾然たる結びつきを感じないではをられなかつた。

朝毎に庭の花を手折つて床の上に直かに並べて供へるゝ濃艶な椿の群を古い佛さまがじつと見守つてをらるるお姿がかぎりもなく尊かつた。

法然院の萬里小路さんに請じられて、ねんごろなおも

てなしにあづかり、歸り途に大島徹水先生をお訪ねして鐵齋の魚籃觀音を拜見させていたゞいたことがあつた。が、今は萬里小路さんも徹水先生も故人になつてしまはれた。

三十年も前のことである。仁和寺光琳風の椿の繪を見たことがある。いまだに繪の模様なり、色なりをはつきり記憶してゐる。

まだ戰時中、房州富浦に和田正系博士をお訪ねしたをり、佛さまに供へられた一輪の白椿を飽かずながめたことがあつた。

波の音が枕頭にかよひ、瑠璃鳥が軒端に近くさへづる

曉の廣間の薄明のなかにぼつかりと浮かんでゐる白椿を
尊く拜んだことであつた。

椿が咲くところになれば椿の所縁によつて、さまさまの
佛さまを思ひ、さまさまの人を懷ふ。

わたくしの一人の友人は去年の春、縁日に行つて椿の
木をもとめて來た。友人はさつそく椿を庭に植ゑた。そ
れを見てゐた隣人は「その椿は枯れてゐますよ。根付き
ませんよ」といつた。

友人は隣人の言葉に耳も藉さず、水をやり、丹精をこ
らして育て上げた。若いサラリーマンの友人にとつては
一本の木を植ゑることは人生の幸福そのものであつた。
椿は枯れもせず、今年の春になつて可憐な蕾をさへ見せ
て來た。

友人は小をどりしてよろこんだ。

隣人は言つた。「その蕾は開かないで落ちてしまひます

よ」

しかし友人は毎朝出勤の時間が來るまで庭に下りて椿
の前にたゝすんで、一日一日と大きくなつてゆく蕾をな
がめ、胸をはすませては花の咲く日を待つてゐた。

しかし或る日友人が家に歸ると、庭の椿から蕾の姿は
失せてゐた。

隣家の幼兒がきや、たつを持ち出して蕾を撈り取つたの
である。

わたくしは友人の落膽振りを想像することができ

た。友人は隣家の子を叱らなかつた。かれは幼兒をさとし
て云つた。

「坊や、この花だつて人間と同じこゝろを持つてゐる
のだよ。寒い雪のなかにふるえながらも、椿は春になつ
たら綺麗に咲いて見ようと、そればかりをたのしみにし
てゐたんだらうよ。それなのに蕾のまゝ坊やにむしり取
られたのでは椿は可哀想だよ。椿は泣いてゐるだらう

よ」

わたくしは友人の言葉をありがたいと思つた。自分の心の裡のくやしさを忘れて「椿は泣いてゐる」と云つた友人のこゝろを尊く思つた。

印度の詩人タゴールの詩に散つてゆく花をうたつたものがある。

その一片一片の花びらが嬉々として散つてゆくありさまが、あたかも、學校の暗い教室から解放されてゆく子供たちに似てゐるといふやうな表現であつた。

靜かに散つてゆく晩春の花を觀て寂しいと見るのも、たのしいと見るのも、その折々の心の持ち方一つであるが、いづれにしても一片の花びらにも人間と同じこゝろを持つてゐると考へるのが尊い東洋的なものゝ見方であり、ものゝ感じ方である。

わたくしが子供のころ、東京から昔の領主の若さまが

郷里の町へ歸つて見えた。舊藩士たちの間には下駄を脱いで沿道にお迎へした者もあつた。

若さまはまだ十二三歳の少年であつた。舊藩士たちは旅の徒然をなくさめるために見事な牡丹の大鉢を献上した。

若さまはつれづれのまゝに牡丹の花びらを撈り取り、酸漿のやうにふくらませては捨てられた。その話を聽いて子供心にも勿體ないことだと思つたが、故郷の大人たちは「さすがに殿様はちがふ」といつて感歎してゐた。

今になつて思ふことであるが、あのころ側近の間に、椿の蕾を撈り取られたわたくしの友人のやうな言葉を語つて聞かせる人があつたら若さまは尊い生涯の教を身につけたであらうに。

一碗の茶のありがたさを拜んで喫むところに宗教があり、一片の花びらを尊むところに人生の救ひがある。

時評

中國に於ける二つの佛教

言ふ迄もなく、中國は現在二つに大きな而も内容的には全然相反した世界に別れてゐる。そして、大陸を支配する中共の様子は今まで竹のカーテンの彼方の事として、憶測のみを逞しくして知り得る程度であつた。

近時多くの日本の學者や政治家が往來する事や、又中共からの引揚者等に依つて、次第にその様子も明るみに出て來た。

南博氏著の「中國」(副題、ヨーロッパを追いつくもの——光文社發行)は、氏が四十日間の北京の滞在中の見聞記であるが、之を素直に受け取るならば、中國がどんなに變り、そして且つての吾々の常識的な中國の理解と、どんなに違つてゐるかを知らされるであらう。即ち、中國は大いに發展したのであり、立派になつたのであり、南氏に言はせるならば、近き將來に於てはヨーロッパを追いつく近代中國の實現があると云ふのである。

こうした報告を、たとへ吾々が割引して考へたとしても、中國は、少くも過去の中國でなく、統一され、新しい氣運に満ちた近代國家へと着々進みつゝある事を否定する事は出来ない。

こうした中であつて、吾々は、この國の佛教がどの様であるかと言ふ事に、誰しも關心を持つてゐる事であらう。特にそれが、「宗教は阿片なり」とする共產黨の治下に於てあると言ふ點に於て、猶更である。

今、此處に「中國に於ける二つの佛教」と言ふこの二つとは、台灣にある佛教と、大陸にある佛教と言ふ事ではなしに、同じく大陸にある佛教が、見方の相違で、あゝも言はれ、こうも言はれると言ふ現代の世界狀勢の一端としての中國佛教の分析なのである。

勿論、台灣にも佛教はあり、其處には、中國國民黨と行を共にして來た過去の中國佛教の集合がある。然し、これは吾々が常識で考へ得る且つての中國佛教の亡命の姿だと思へば大差ない。もつと極端に言へば舊態已然たる佛教があるのみだとも言へるであらう。そして、この事には余り關心はない。

中共治下の佛教は、これに反して興味ある關心がある。一つは果して中共治下に佛教があるのであらうかと言ふ事であり、もう一つは、あるとすれば、どんな形であるのであらうかと言ふ事である。

常識で考へると、最早や中共治下には佛教は抹殺されてしまつてゐるであらうと見られる。事實、ことまことしやかにその様なニュースも飛んだ。例へば「海潮音」第三十三號に掲載されてゐた台灣に居る樂觀法師の「中國佛教復興の建議」(牛場眞言譯、中外日報登載)にも、

「大陸の陷落以來、已に三年の歳月を越えてゐる。この長慢な歳月中に於いて、われわれ中國の佛教の千余年來傳統された制度と僧衆の生活習慣とは、同様に赤流の刷洗淨盡を受けて、過去われわれの僧伽が、資生と辯道とに頼つて來た所の寺廟、叢林は今やその色彩を改變してしまつた。その或るものは工廠となり、又或るものは學校となり、醫院となり、村郷の墓所と變

り、託兒所と變化し、甚しきに至つては共匪の俱樂部とまで變り果てている」

と、恰も大陸佛教の全滅の様な報告をしている。

然し反面、こうした大陸佛教の現實も、實は自業自得である事を師は認めてゐるのであり、

「凡そ過去に於ては盲目尊大、自私自利の思想が俗を作してゐたが、腐敗した生活習慣は必ず徹底的に糾正さるべきで、改革之れ務め、新しく志を立て直し、人間を鍊えなおす。こうしてこそ、始めて中國佛教の事業を復興する負擔を擔ふに堪え、新中國の佛教を建設することが可能である」

として、「將來大陸を收復した曉には」天いに反省改善して、中國佛教の復興を計らふと言ふのがこの「復興の建議」なのである。

所が之に反して、同じく中外の報ずる中に、大公報新聞に掲載された巨贊法師の「新中國の佛教」と題するものがある。これに依るときは、

「佛教は眞正な信仰の自由の立場を得て、中國人民政府協商會議共同綱領第五條に規定する中國人民は宗教信仰の自由なることと言ふことに依つて、政府は完全にこの種の自由を保障した」とあり、

「北京の廣濟寺、雍和宮、上海の玉佛寺、靜安寺等は全く面目一新し、杭州の靈隱寺は現に修理中である」と言ふ。

同じく大陸の佛教を論ずるものであり乍ら、恢復に類した佛教と、隆々と復興しつゝある佛教と一體どちらが本物なのであらうか。「中國の二つの佛教」とはこの事を言ふのである。そして、こ

の世界には、どちらが眞相ともつかぬ謎の様なことが、余りにも多いのである。

近時、中共引揚者の一人である上海別院の楠了俊氏の話に依れば（三月三十一日、中外掲載）中國には嚴然として佛寺はある。

「有名な玉佛寺も、極安寺も政府が修理して、住職も居ります、しかし社會的には寺院活動はしておらぬようです」

「宗教の自由は守られています。ところが布教は許されていません。この布教は政治に對する批判となるからでせう。つまり中共では、佛への供養はよいが、生きた人間に布教するのはダメと言ふわけです」

と言ふのである。

先ず、この邊がどうやら眞相ではあるまいか。即ち佛教は、全然異なつた形に於て存在し續けて居るのである。そしてそれは、個人の信仰としてののみ、自由なのであり、又過去の歴史的遺物としては、その存續が許されてゐると言ひ得るのである。

現に中共治下に於ける精神工作は、徹底したものがあつて、諸文學作品を通じてみても、精神改造は熾烈である。こうした中にあつて、所謂迷信にも近い宗教の存續が、どうなつて行くかと言ふ事は余りにも明瞭である。そして中國の佛教が、又これに近い存在であつたとするならば、その將來も又明瞭である。それが、中共治下であるに於ては、今更言ふまでもない。

佛教の在り方が、どうあるべきかと言ふ事と、現代中國の様相とは、最早や問題は別であるが、奇怪な中國の佛教の様相と共に吾々日本の佛教徒達にも考へさせられる問題が余りにも多いのに驚かざるを得まい。

世法と佛法

竹中 信 常

明治が生んだ一代の傑僧福田行誡上人の言葉に

「佛法は眞諦にして出離解脱の爲めの法なり。世法は俗諦にして所謂有我が凡て其根本となれり。故に世法は迷中の事、佛法は開悟の道なりと重ねて分明に其區別を辯知しをくべきことなり。然るに近頃の佛法を世の爲めに説く可しと云ふ者あり、予云く、釋迦如來曾て國財王位及び珍寶妙衣を棄てて檀特山にのり、修道あらせられたは、果して世法の爲めになされしか、元來世を厭ふて修するのが佛法に非ずや、安そそれ此法を以て世の爲めに説くを得ん。但し其余德を以て自ら民を利し世を益するは固より妨げざる所なり」

とある。その大意は、佛教は一切の世俗的なものをふりすてて出家し、悟りに至る道を極めるものである。世法とは、世智辛い人の世をうまく渡つて行くかけ引のこと、この二つは本來全然別のものである筈なのに、此頃では佛教を以て世を渡る道と心得たり、その教えを金儲けや病氣なおしに使うべしという者がいるが、この二つを一緒にすることは、飴屋が酒徳利と飴とを一緒に賣るようなものであつてとんでもないことである。

尤も佛教の余德で世の中に利益をもたらしたり、人々を幸福にすることは無論結構なことである、というのである。

他の宗教のことはとに角、佛教では近來社會事業が盛んになつて

來て、方々のお寺で幼稚園を開いたり、又教團として病院・學校・養老院等を經營するものが多い。一見したところ甚だ結構なことのようにだが、ここで私共はも一度行誡上人の言葉を反省してみる必要があるのではないだろうか。成程世間的には佛教が大いに活動しているように見えるが、然し、それでよいのだろうか。佛教本來の使命が、教育とか醫療とか經濟とかにあるのだつたらそれも結構である。然し元來佛教とは世のくさぐさの身分、名譽、財産等一切をふりすてて、人間本來の姿に立ち歸つてからそこから出發するものである。従つて眞實に此道をすすむ者にとつては、まず第一に自分自身がいかは無智であり、無力であるかを眞底から自覺することが大切となつて來る。正直にいつて他人どころのさわぎではない。自分自身が救われるか、救われないかの問題なのである。片手間の内職に一寸やつてみようかといったものではなく、全心全靈をそれに打ち込んでこそ、始めて所期の目的を達成することの出来るものなのである。このように佛教とは、一應世間とは沒交渉な、何のかかわりもないものなので、出家——家を出るとか世捨人とはこのことをいい現わしたものに外ならぬ一度出た世間であつてみれば、今更中途半端で歸つて來ることは出来ない。もし歸つたとしたならば、それは己の佛道修行を途中で投げ出して來たものに相違ない。それで

なければ最初から本當に家を出た人ではなかつたのであろう。ところがえてして、目にみえぬ、はかのゆかぬ、佛教修業よりは一見華々しく、人のちやほやする世間に、歸つて來たいのが人情なのである。

一方、世間でもまたそうなので、佛教というものをほかに使いたがる病氣になれば病氣のなおりますように、貧乏になると金が儲かりますように、仕事がうまく行かぬときには何とかうまくゆくように、と。つい觀音様やお不動様、さては阿彌陀佛様にまでお願いしてみることとなる、お賽錢を上げるのと、寶くちをかうのと、さのみちがわぬ氣持でいる人が多い。目にみえた御利益がないと損をしたような氣分にもなる。してみれば、佛教は醫師にもなり、占師にもなり、株屋さんにもならねばならなくなつて來る。これでは佛教というものは全く何處かえ消し去られて、目下流行の諸宗教丈けが残つてしまふことになる。

行誡上人が誠められたのはこのことである。世俗の單なる功利的な欲望におもねり、その方面のみを重んずれば、佛教の眞實は失われて、只その形骸丈けの姿になつてしまふ。實りのない形にのみこだわつて、やがてその姿をも歴史の上から抹殺されてしまふか、改めてその第一歩から再出發して、佛教本來の姿を現わして行くか。行誡上人在世の明治時代の世情を反映して、佛教界に望まれた眞意は正にここにあつたといふべきであらう。

だが然し、上人とても近代に生きた人である。いなむしろ、その思想は現在に通ずる俊敏さを持つていたのである。されば、一徹に

佛教をして、そのみに止めしめようとはされなかつた。眞實の信仰に發し、確固たる信念の上に立つての事ならばむしろ、それは世を益し、人を利する道としてすすんでなすべきである。斯る立場に立つての社會事業、教育事業こそは、眞實に佛教徒のみのなし得る道として、斷行せねばなるまい。法然上人のお言葉に

「たとへ余事をいとなむとも、念佛を申し立てをするとおもひをなせ、余事をしし念佛すとはおもふべからず」

とある。念佛の行の上に立つての余事——世法ならば、それもまた念佛生活を助長する意味で結構である。反對に、世間の事柄に專注して、かたわら念佛を唱えるのでは、これは念佛行者ではないというわけである。世法はこのように、佛法に立つての世法であつてこそよし、世法のために佛法を立てることは本末でんとうというの外ない。

されば、行誡上人は

「……初は佛法に一寸と世間を雜ぜしものが、末には佛法に世間を雜ぜずして、世間一寸と佛法を雜ぜて、水くさき佛法とはなれり、歎すべきの限りなり……」

といつて、世間の中に佛教の沒し去るのをいましめられているのである。

そこで、終りに至つてのお願いは、佛教の側でも充分に、佛教の眞意を根本としての行き方をするように心掛けるかわりに、これを受ける世間の皆さんも、どうか佛教に世俗的なことのみを要求せず、まづ第一に信仰と眞實の智慧とを要求して頂きたく思う。

實

話

觀音奇瑞

受話機を耳にすると知り合いの大工さんからだつた。突然だが今すぐ来てくれと云うのである。一體用件は何かと聞くと普請してある家の床下から観音きんが出たからお經を上げてほしいと云うのである。

行つて見ると其處は此の街で知名な外科醫江氏の家だつた。江氏夫人と電話をかけた大工さんと江家に何かと手傳つてくれてると云う青年と三人で私を迎えてくれた。

江氏夫人と私は初對面なので型通りの挨拶をすませると「まあ、早速ですが」と夫人は一片の古木の上に異様な型をして立つてゐる木のこぶ様の物を私の前にさし出した。

突端にはつとした。其の異様な木のこぶ狀の物はあの法隆寺の百濟觀音の様にすつきりとした觀音像に見えるのである。驚いた様にして居る私に夫人は静かな口調で口を開いた。「此れが今日出て來たので御座います。今日は十七日で吉日を選び此の家に神棚を移し爐を切つたのですが、其の床の下から發見され

たのです。大工さんが面白いものがあると云つて拾い上げて見るとこれだつたのです。二つ出て來ました」

今一つ示されたのはやはり一片の古木に丸く木のこぶ狀のものが數ヶついている。夫人の語る所による此れは「まんねんだけ」と云う木の子の一種で非常に珍しいものであると云う事だつた。

まんねんだけとは生け花の時なども不老長壽と云つた如き目出度い意味で稀に用いる事があるとの事で此の様に觀音様の様な型をしたものなど全く珍しいと云うのである。

大工さんが拾い上げた時思はず周囲の人が「あつ觀音さん」と云つたと云うのである。なる程二ヶ出て來た中の片方は全く觀音様のお姿である。木の子の一種と云つてもカチ／＼と堅く俗に云う木の耳の様なものだつた。北海道では居間の床板を三尺四方に切りわくをはめて爐を作るのであるが其の爐を切つた真下から出たと云うのである。しかも其の爐の場所が江家で其の家を手に入れてから氣のむく所を選んで前に住んで居た人とは別に今回の場所に定めた事によつて發見する機を得たのであるから、全く幸運と云うわけなのである。

「此れはどうしても江家にさずかつた物と思ひ觀音様としてお祭りしたいと思ひます。」

其れに江家の祖父は觀音様の信仰に生きた方でありました。今日は十七日の觀音様の御命日であります。本當に不思議な因縁と思ひます。片方の丸く生えてゐる方のまんねんだけでも丁度末廣がりとなつて八つ程ついて居りますが、此れは今迄子供がなかつた江家に子供がさづかり、然も末永く盛えて行く事を示す縁起物の様に思ひます」なる程夫人にそう云われて見ると片方の觀音様でない方の古木には丁度扇を広げた様な型のまんねんだけと呼ばれるものが大小八つ付いてゐるのである。

大工さんの話では其の古木は松の木で家を立てる時に方を計る糸を引く杓(く)に用いたものだろうと云う事だつた。

このまんねんだけと呼ばれる奇茸の觀音様は丁度御光と思われる部分が法隆寺の百濟觀音のようであり、又、其の御腰のあたりは掛軸の揚柳觀音と此れ又同じようである。勿論御手御足の如き精細に表れてゐるわけで無く其の輪郭を以て觀音様と拜されるのであるがあの慈悲に満ち満ちた御姿、御ものごし、まあ何と云う奇瑞かと私は驚いたのである。

何分本夕は御開眼のお勤みを上げて頂きましたと云う夫人の要請に私は般若心經を讀誦して、其一切功德 慈眼觀衆 生福聚海無量是故應頂禮と掌を合せたのであつた。

夫人は種々の家庭内の事等を詳細に説明して此の様な奇瑞のあつたのも今後の福壽吉祥と示すものでありましようと思ひ感激するのであつた。(函館稱名寺執事須藤隆仙)

愛と憎のアンビバレンツ

静岡縣 高瀬 磯

本誌四月號の卷頭言、竹中氏の「愛憎」に一言愚見を――

―讀者のページ(一)―

自由教育の創唱者ニール氏の「憎しみは愛の反對ではなく、愛の變形である。愛の反對は無關心である。」という言葉引用されてあつた。愛情を量的にみたりビドウを感じることに少い相手には憎しみを感ずることも少いから「無關心」であることは當然であるが「憎しみが愛の變形」ということは人間同志、殊に近親者の間で深い愛情を抱いている相手にはその反面、憎悪もまた深くその故に愛と憎との調和、統一が破れた場合には深刻な家庭不和や殺傷事件まで惹き起す。

佛教でいつて有愛、欲愛とは自我的な本能感情、情緒的な愛で謂は生(ナマ)の愛情であるから「憎」の面でも生々しく働く。佛教の理想とする「無我の愛」は超自我的な愛で凡ての人間が超自我的(昇華されて)である

なら社會に何にも忌わしい事件は起らないであらうが、大かたの俗人は「愛と憎」のアンビバレンツ(相反併存)の中にさまよつて一生を終る。世は正に愛別離苦、厭憎會苦の娑婆である。

だが、「愛と憎」とが入り亂れ拮抗、調和しつゝ「併存」するということを悟得することともまた俗人の一つの段階でもあらう。

(筆者は女流精神分析學研究家)

我が宗門の誇り

傳通院護持會委員 清水義忠
上野東照宮理事

櫻の花も散り春風は毎日都塵を吹き上げて居る今日此の頃、私の心も春の浮き足に乗つて何となく落ち着かず、ざわついた毎日を送つて居る時雑誌「淨土」が机の上に置かれて居るのに氣が着きました。

早速開いて毎月愛讀して居る吉田絃二郎先生の御隨筆を始めとして讀み進む内特に「新興宗教」と題して齋藤昭俊氏の御高見を拜讀こゝに淨土宗の誇りを感じし喜びに耐へない次第です。齋藤氏は新興宗教を解剖するに靈友會を以つてして居りますがその宗義をとら

へ宗論を戦はせずその長所を認めて最後に我々既成宗教への教へとして、「よきものに學び常に向上の心持をもつことこそ肝心なのであつて、新興宗教を理解もせず誹謗し排斥することはなすべきことではない。正しく見、正しく聞き、正しく知ることの美しさを更めてこゝに云ふ必要もないのであらう。」と結斷せられて居るのであります。

先に「ブジスト・マガジン誌にて眞宗の某學僧が「生長の家」の教義をとらへて盛んに誹謗して書きたたのであります。之が既成宗教の脱皮出來ぬ主眼であり亦一般大衆から離れて金城に「とむろ」する獨善主義と思われるのであります。そのよきを取り惡しきを認めずおのれを延ばす處に進歩があり、宗教の本質があるのではないでせうか、誹謗された一方にてはその誹謗の度合に應じて之又對抗せざるを得なくなるものです。こゝに到つて佛教と云ふ處の「佛・法・僧」の和合は破られてしまふのではないかと私は愚考し眞宗の某學僧の識見を疑ふものであります。然るに我が齋藤氏は實に謙讓の態度を以つて決斷せられて居るのを知り私は私自身の宗派の淨土信徒として實に誇りを感じたのであります。我が淨土宗の諸先生の御高見を生かし今後大いに社會救済の宗教とし佛教の存在意義を明かにし、單に葬祭儀式の宗教に偏せず、佛教各宗と相携へて國民の生活面に心のより處として活躍せられん事を望む次第であります。



ベーター博士に思ふ

藤 田 寛 海

昨年十二月號の「文藝春秋」に今東光氏が「惡眼視之」といふ題でベーター博士のことを書いて居られた。

おそらく、お讀みになつた方も多いことと思ふ。

「惡眼視之——惡眼ヲ以テコレヲ視ル」といふのは法華經にある言葉で、惡意をもつて視るときは、どんな人間の行ひでも總て「惡」と觀ぜられると云つた意味と解される。

こゝにいふベーター博士は英國の生れで、國際法學者である。大正五年から約三十年の長い間、外務省の顧問をして居られたが、豊かな教養と香り高い知性とを具へた、その溫和な人からは廣く人々に慕はれ、また懷しまれもした。

昭和の初め頃、博士は當時やゝもすれば暴走しがちのわが國の外交に、常に正しい判斷と方向とを與へようと努められたが、特に國際聯盟がリットン調査團を派遣したとき、公正にして不偏な學者としての立場から、いろいろと日本に對する助言をされたことは有名である。

だが、此の善意にもかゝわらず、日本は間もなく戰爭に突入し、

やがて敗戦のときを迎へるに至つた。

博士は祖國であるイギリスを愛されるが故に日本の風土を愛し、また日本そのものに深い愛情をそゝがれた。しかし却つてそのため叛逆罪に問はれ、更に國籍をも剝奪されたと傳へきくのである。

「日本」といふ特定の國を愛したことは、博士にとつて誠に不幸な結果をもたらしてしまつた。

いまは總てを退かれて一の宮に隱栖して居られるが、八十余才の高齡にもなお、日本への愛情は燃えさかつてゐる。

異邦のこの老學者の誠實を私たちはどのように受けとめたらよいであらうか。

そして、この「ひたぶる」な姿をみるにつけても「私どもは自身の愛國心といふものをもて余さずにはゐられないのである。」と云ふのは、「愛國心といふものが、自身を生みつけてくれた特定の國土にのみ醗酵し燃焼するものだとするならば、愛國心といふものは、畢竟、小來的な盲愛にすぎないからである」と今東光氏は述べてゐる。

異郷に在つて國籍を失つた、この老博士の胸中を想ふとき、感また切なるものを憶えるであらう。そして、「英國人の誇り高い自尊心と寛大さによつて、この英國が世界に誇るに足る國際法學者を無籍者として追放した處の所謂罪なるものを免されんことを願ふ」といふ「惡眼視之」の主旨にも、また共感を禁じえぬであらう。

ところで、私は不図した奇縁で、この老學者と相識つたのである。

それは、一昨年秋に外國の諸學者による日本研究の論文集が出版され、編輯者であるシーファー博士の依頼であの紹介と書評を發表したことがあつた。

もともと、この論文集は公正な學問的立場から「日本」を究めてその本當の相を把へ、延いては東洋と西洋との「懸け橋」となうといふ理想のもとに生み出されたものであつた。そして、この出版によつて私はピアソン博士を初め、戰爭中消息を絶つてゐた幾人かの異邦の先人や友人たちと再び舊交を温める喜びを得ると共に、また新に同學の研究者たちとも相識つたのであるが、その一人がベーター博士なのである。

博士はこの集録に「西洋への文學的日本紹介」といふ論文を發表して居られた。

(11)

それは外國人によつてなされた日本研究と海外への紹介について特にベリー提督の渡來までを限つて論じたものであるが、用ひられ

た資料の廣さと把へ方の正確さには驚かざるをえなかつた。想ふに在日三十余年の體驗がその基盤となつてゐるに違ひない。

私はこの貴重な研究について賛辭を惜しまなかつたが、博士からは早速町重な謝辭が寄せられた。

そして、求められるまゝに私の論文をもお送りしたが、折り返しその一・二篇を英譯するやうにとのお勧めの手紙を頂いたのであつた。

博士と私との交渉はこのやうな學問的な狭い範圍を出でないのはあるが、高齡にもかゝらず更に愈々「日本」そのものの眞の相に觸れようとする努力には、心からの敬仰と感謝とを憶えるのである。

そして、この「努力」こそは、廣くまた大きい「愛」に深く根ざしてゐることを見逃すわけにはいかない。

民族や國境をこえ、憎惡や敵愾心をものり越えて、たゞたゞ愛するものに身も心をも捧げつくさうとする雄々しさ、總てを貫くその誠實は、また愛する「日本」を信じ、延いては自分自身を信ずるところに生れたのである。

それはアミダを信じ、これに身をゆだね救はれようとする念佛者の清純さとも通ずるであらう。

一日も早く博士の罪が許されることを願ふのは、たゞに博士を知るものだけの感傷であらうか。(山形大學助教授)



一枚起請文

佐藤賢順

一枚起請文いちまいきしょうもんは日本淨土教の開祖法然上人が遺のこされた教えであつて、淨土門徒が朝に夕に佛前に讀誦どくじゆしている言葉であります。これは法然上人が八十歳を一期いちごとして亡くなられる前々日に、勢觀房源智せいくわんぼうげんちという古くからの弟子の需もとめによつて、自ら筆を執つて書いて與えた遺訓いくんで、淨土門徒の正しい心構こころがまえを教え、邪義邪説に陷おちることのないように誡めたものであります。一枚起請文とか一枚消息とかいわれているように、わずか一枚の紙に書かれた短い法語でありますけれども、これは上人の八十年の生涯しょうがいの思索と體驗の結晶でありまして、その一語一語が深い反省を物語り激しい情熱に満ちております。

しかしこの法語は上人入滅にゅうめつの間近まじになつて突如とつじゆとして口にせられたわけではなくて、實はこれとほとんど全く同

じ言葉が、それに先立つこと十年近くも前に、或はもつと前に書かれていたのでありまして、淨土宗の二祖にそ鎮西ちんせいの聖光房せいこうぼう辨長べんちやうは、このような法語ほうごを受け傳えて、師法然のもとを去つて九州へ行つております。聖光房が上人のもとを去つたのは、上人が七十二歳の時でありますから、よほど早くからこのような言葉が書かれていたものと考えられます。思想も人格も圓熟えんじくの域いきに達した七十歳前後から、入滅のところに至るまで、終始しゅうし變らずこのように説かれたのでありますから、一枚起請文の價值は一層高く評價されるのであります。その全文は次の通りです。

もろこしわが朝にもろもろの智者達ちしやたちの沙汰さたし申さるる觀念かんねんの念ねんにもあらず。又學問をして念の心を悟さとりて申す念佛にもあらず、たゞ往生極樂おうじやくごくらくのためには南無阿彌陀佛

と申して、疑なく往生するぞと思ひとりて申すほかには別の仔細候わす、たゞし三心四修と申す事の候はみな決定して南無阿彌陀佛にて往生するぞと思ふうちにこもり候なり此のほか奥深きことを存ぜば二尊のあわれみにはすれ本願に漏れ候べし。念佛を信ぜん人はたとい一代の法をよくよく學すとも一文不知の愚鈍の身になして尼入道の無智のともがらに同じうして、智者のふるまいをせずしてたゞ一向に念佛すべし。

この一語一語には心の底から湧き起る生命のリズムが躍動して、信仰の論理ともいふべき一種の論理が疊みかけるような力で読む者に迫つてきて、堅い決意と揺がぬ確信とへ導かずにはおきません。一枚起請文は読む人の心の持ちようによつていろいろ異つて受け取られます。丁度濁つた水には濁つた影が映り、澄んだ水には澄んだ影が寫るやうに、この法語の意味は、読む人の心次第で、浅くも深くも、低くも高くも読み取られるのです。又、年齢によつても二十臺と三十臺と四十臺とでは、それぞれその意味の理解が違つてくるのでありまして、人生経験が深まり信仰上の修練が積まれてくるに従つて、その意味もいろいろに

異つて理解されてきます。もし二十臺や三十臺そこそこで一枚起請文にひじやうに感動したという人があるとすれば失禮な言い方ですけども、少しおかしいと言つてもよいと思います。

前置きはその位にして、内容のお話に入りますが、便宜上、本文を三つに區切つて、それぞれの主題についてお話ししましょう。主題は口稱念佛——口に南無阿彌陀佛を稱えることゝ、極樂往生と、一文不知ということになります。まず最初の口稱名號について。

本文の初めの一句は——

もろこしわが朝にもろもろの智者達の沙汰し申さるゝ觀念の念にもあらず、また學問をして念の心をさととりて申す念佛にもあらず。

という一句であります。こゝでは念佛とは字の通り、心のうちに佛の姿を念すること、すなわち觀佛ではなくて、口に佛のみ名を稱えること稱名であるとな念佛の意味を定めております。今でこそ念佛といへば口に南無阿彌陀佛を稱えることであるというのは、誰もあやしみはしませんが、こゝまでに至るのには幾多の曲折があつたので、念佛を稱

名と斷じたのは後に述べますように信仰のみが、よくなしうる所の偉大なる決斷でありました。

法然上人は念佛を三つに區別されました。第一は中國の天臺大師が摩訶止觀（まかしくわん）という本の中で説いた念佛で、心を鎮めて阿彌陀佛を念じ、阿彌陀佛が、直ちに、即空即假即中（そのまゝ、ただちに悟りの内容である一切皆空でもあり、又、迷いの心の対象と）（なるものでもなく、そのまゝ、又、有るとか無いとかとらわれを離れた真理）であるとして一心三觀（いっしんさんかん）（一心に、上にのべた三）を行う大變むすかしい念佛であります。第二はわが國の惠心僧都が往生要集（おうじようようしゆ）の中で説いた念佛で、心のうちに佛の姿を念ずる觀佛（かんぶつ）であります。「もろこしわが朝にもろもろの智者達の沙汰し申さるゝ觀念の念にもあらず」という意味は、淨土の念佛は天臺大師や惠心僧都などのいう念佛ではないというのであります。次に第三の念佛は唐の善導大師の説いた念佛で、口に南無阿彌陀佛を稱える稱名であります。このように念佛に三通りあります中で、淨土の念佛、法然上人の念佛は口稱名號の念佛であります。

そこで惠心僧都と善導大師と法然上人——この三者がどのような關係になるかをお話しておくことが、口稱名號の念佛を理解して頂くために必要でしよう。惠心僧都は今か

ら千年近くも前のわが國の精神界を代表する先覺で、「山越しの彌陀」のような阿彌陀佛の來迎圖像を數多く描いたり「往生要集」を著したりして、信仰を情緒的、藝術的に表現して、信仰に具體的な形像性を與えました。その點で當時の精神界に大きな影響を與えたばかりでなく、その時代の精神的方向を決定して一種の雰圍氣を作り出すほどの力を持つていました。法然上人はこの雰圍氣の中に育つた人でしたから、法然の淨土教は惠心の「往生要集」によつて生れたといつてもよいほどであります。誠にもし惠心僧都が現れなかつたならば、法然の淨土教は生れなかつたとも言えるでしよう。しかし忘れてはならないことは、惠心僧都の往生要集の線を延長してゆくと、そのまゝ法然上人の念佛になつたのではないということです。そこには連続していながら絶ち切られている一大飛躍があつたのであります。それはどういう意味でしうか。惠心僧都の考えは觀勝稱劣（くしょうじょうれつ）といつて、觀佛は勝つてゐるが稱名は劣つてゐるといふので、觀佛に併せて稱名を説くけれども、それは觀佛に堪えられない人は止むをえないから稱名でもよいといふまでであつて、稱名が優れた行であるから勧めるとい

うではありません。この點が法然上人と全く異つています。

では善導大師と法然上人の關係はどうかといふますと、法然上人は往生要集の念佛によらず、善導の念佛によつて淨土教を開いたのであります。時代の感覺からいへば惠心僧都を受けたのですが、信仰上の傳統としては遠く五百年も隔つたしかも異境いきようのこの聖者を受け繼いだのであります。上人はしばしば「偏ひとえに善導による」と語つておりますが、惠心によらず善導によつたことは、一大飛躍でありました。觀念の念佛から稱名の念佛、本願の念佛へ飛躍したのであります。

無量壽經には阿彌陀如來の本願のことが記されていきますが、それによりますと、如來がまだ法藏菩薩という修行の位におられたとき、多くの佛の國々を觀て、それらの長所を取り短所を捨て、理想の國を作ろうとして、四十八の誓願を立てました。そのうち十八願が最も重要な願であつてそれは、十方の衆生が眞心まごころからこの國に生れたいと願つて佛を十度とたび念するならば、必ずこの國に生れさせてやろうという誓ひであります。この「十度念するならば」という一

句を善導大師は解釋しして「わが名號を稱すること十聲とこえに至るまで」と言い換かえました。つまり念佛を稱名と定めたのでありまして、これは大師の偉大なる獨斷とでもいふまいでしょうか、理屈を言えばこれにはいろいろの批判ができるでしょうが、そういう日常一般の理屈や判斷を超えてこのように斷定した所に信仰生活の深い意味があるのであります。

こうして法然が専ら善導によつて稱名しょうみょう念佛ねんぶつの一行こそ如來に救済される唯一の道であるとしたのは、その基礎經驗として深い自己反省があり、率直そつちよくなる人間の見直しがあつたからであります。上人は人間を、知識の方面から道德の方面からも、ありのまゝに見直して、いずれの方面からいつても人間ははかなく頼りなきものであることを見定め、人間の力の限界を見極めたのであります。このようなはかなく頼りなき人間にとつては、稱名念佛こそ佛に救われる唯一の行であるとせられました。これが本文の第一段の意味であります。

金勝の阿彌陀寺

—古寺訪問—

新 保 義 道

東海道線草津驛（滋賀縣）南方約三里、以前この金勝村を訪れた者は口を揃えて、「もう二度とはこんぜ」と言いたらわした程山深きところに、淨土宗の古刹金勝山阿彌陀寺がある。併し現在はその難路の面影もなく、廣い道路にバスの便もあり四方山に圍まれ、特に秋は錦おりなす山々の風景、遙か天平の昔榮えた跡を探ねるハイキングコースとして好適の土地である。

同地は古都奈良の東北約十里、都の鬼門長に當るので、鬼門除けとして聖武天皇の勅願によつて、金肅菩薩良辨僧正この山上に金勝寺を創建されたと傳え、天文年間一山悉く焼失せしも、未だ國寶、重要美術品の數々を藏してであつて、往昔既に佛法の榮えた土地である。

金勝山阿彌陀寺は同村の中央に在り、かつては淨嚴宗の一派を稱えた程の巨刹であつた

が、明治年間の火災の爲往時の盛況を偲ぶことは出来ないが、本堂、山門、庫裡、書院等完備し、その古寂な觀は、境内に足を一步印した時、大原寂光院の參道を思ひしめ、自ら襟を正さしむるものがある。昔は問はず近代に例をとつても、近世の大徳大鹿愍成、大島徹水僧正に次ぎ、現在石橋戒道僧正と學德兼備の高僧の住せられるのも、又故あるかなと思ひしめる。

昨秋十夜法要に招かれて念願の同寺にお参りする機會を得た。石橋大僧正（現大本山清淨華嚴法王）も本山より下向され、初夜の法要の後御前の御居間で、十數年前と少しも變らぬ七十五歳とも見えぬ恩師の元氣な御温顔に接し、夜の更くるも忘れて色々とお話を承つた。

當寺の開山淨嚴房隆堯法印は初め天臺比叡山に登つて修學し、法印大和尚位に登られたが、もとより名利をいとわれ、

「天臺の法門は誠に結構ではあるが理解し難く修し難い教で、到底常人の修行して證を得ることは困難である。機根の劣れる者はどうしたならば迷を離れることが出来るであらうか」

と惱まれ比叡山上の諸尊に祈り、特に石山寺

の觀音にお籠りして靜かに念誦している時、ふとまどろみ、香染の高僧が内陣より歩み寄られ、

「汝の願うところは満足す」

と七卷の書を授けられると夢みて目が覺め、感涙にむせんで本尊にいとまごいして歸ろうとせられる時、異形の童子が

「たやすく離れる法門は唯淨土の一門本願の稱名念佛の外なし」

と書物を渡されて見えなくなつた。その時授けられた書物が、向阿上人の三部の假名抄であつたと傳えられている。

そこで法印は比叡を降り、向阿上人の遺跡である清淨華嚴院の定玄僧正の門に入り、淨土の法門を學ばれたのである。そして應永十一年三十六歳の冬、此處江州栗太郎金勝山の奥の草菴に入り一人靜かに日課八萬四千を稱えられていた。近郷の人々は法印の徳を慕い、念法を聞こうとしてその草菴に押しよせ、念佛の法に浴していたが、この山は女人禁制の爲に女人は登ることが出来ないで、女人にも阿彌陀佛の御慈悲を傳えようと金勝山の東阪に降りて草菴を作られたのが、この阿彌陀寺の創めである。

第二世堯譽隆阿上人（後の知恩院十九世）

を経て第三世嚴譽宗眞上人は將軍源義政公の家臣で、度々の戦場に功を立てられたが、宿善内にもよほして三十二歳の時淨嚴房に入り隆阿上人の跡をついで第三代とられた、時に近江源氏佐々木高頼深く師に歸依し、田園を喜捨し精舎を建立され、天照佛(後述)のゆかりを以て阿彌陀寺と名づけ、屬院もこれより一方の巨刹となつたのである。

第八世應譽明感上人の代に同國安土に居城を持つ織田信長がこの邊りに狩獵して、この山奥に立派なる寺院あるのを見てこの寺に入り、住持明感上人に對し、

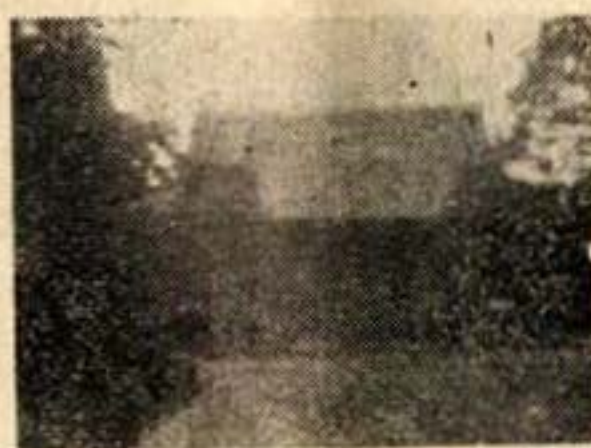
「私も佛法を信じたいと思うが、佛法には種々あるので、どれがよいか迷つてゐる。私のような者にはどの教が一番よろしいか？」

と問われた。上人は

「何れの法門も尊く立派ではあるが貴方の如き武人には念佛の教が一番相應しいものである。そのわけは、念佛は何處でも唱えることが出来る。戦場にいても不斷に念佛を修することが出来て、かりに陣中で死んでも直ちに往生が出来るから

である。」

と答へられた。これより信長は淨土念佛に歸し、居城安土に歸つて後、同地にあつた慈恩寺が佐々木家の菩提寺であるところから之を燒き拂い、こゝに一大寺院を建立し、天正五年上人を迎へ淨嚴院と稱した。これ安土淨嚴院である。



この信長が上人を安土に迎へた朱印狀の文

言は信長の氣風を遺憾なく發揮している。こゝに要點を述べれば

「全勝の坊主安土へ

來い、來ればよし

若し來なければ、

殺してしまふぞ」

と云う意味のことを書き信長の朱を押してあると云う。(この朱印狀

現在安土の淨嚴院に藏すと云う)

古人三傑を評した川柳

鳴かぬなら殺してしまへ時鳥

と信長の面目躍如としていて、聞く者をしてほゝ笑ましめるものがある。

本堂内に安置されている祕佛天照佛と云うのは、開山隆堯法師が當寺を開創されるにつ

いて、伊勢大神宮に七日間參籠し念佛弘法を祈られた時、七日目の曉の夢に神殿の戸が開いて、姿優しい童子が現われて

「阿彌陀佛をまいらす」

と仰せられるとみて夢がさめた、果して近く石の上に阿彌陀佛が一體立つて居られたので、このみ佛を背負つて伊勢、近江の加太越にて近江に入られ當山を開かれたと云い、現在祕佛として三十年に一度開扉されるとのことである。

又境内に古井戸が一つあるが、之は開山法印がこの地に草庵を建てられようとせられたが水の便が悪いのでどうしようかとためらわれた時水が自然に湧き出たのでこゝに草庵を營まれたので、以後この井戸を隆堯水と云つてゐる。

二日間、御縁を結び、朝早く京都へお歸りの御前をお送りし、正午過ぎ小春日和の麗かな日ざしを浴び山越にて次の豫定地に向つてつきせぬ名残をいただきつゝこの寺を辭した。

古寺、名利訪問記

原稿募集

四〇〇字詰十枚以内

商賣と信仰

二度目の求道

中 野 尅 子



庭を拜むことです、社會を拜む事です、自己の心の中から、佛心を拜み出し、佛行を産み出すことであります。

私達は、初め一心に、如來様を拜んだり、神様を信心して見るが正直のところ御利益がない。御利益が無いのではなかつたのだが、「御利益だ」と思つて居るだけで、好意の解釋に過ぎぬ。年限が終つて來ると疑へて來るし、感激が冷めて來る。そしてドコからがお陰で、ドコまでお陰で無いやら、信仰が有るやら無いやら、如來様が有るやら無いやら、わからなくなる。そして正確に「入信」と云う限界が有るだろうか、萬人に共通し、天地に彌滿して確然たる眞理——如來サマと云うものが有るだろうか、二度目の救ひ、二度目の救道、眞の宗教と云うものを再び要求して來る。

初めの信心は、有るものとして信じて掛つた、人から聞かされて満足した、自分の感情で有難く思い、知性が満足すれば無性に喜んで居た。そしてより多くを知り、より多く感情の溢れるものがあれば、それで自分が自分に感激して居た。それで知識の集積や、感情の沸騰だけで自分の生活を美化し、力づけることが出來た。

信心と云うのは、神様や佛様を祀つて、何か神様如來様から救つていたゞく事だと云うて一心に拜むが、本當は、信仰と云うことは「佛を拜む」より「自己を拜む」ことだと思ひます。神を拜むより人を拜むことだと思ひます。人を拜むとは、雲の上の神様を拜んだり、彼方の淨土の如來様をコチラから拜んで居るのでなく、先づ家

而し何か幸福の破綻や、御利益と思へる事の轉覆や、理性の目覺めなどで、今迄の信仰では動きがつかなくなります。即ち外に信頼の出來る機關車が無くなり、内に力を發動するモーターも、エンジンも無いものだから、立派な一等展望車か、寢臺車が連結なしに放り出されたように哀れです。だから冷靜に自己をふり返つて顧ると

盲目的な求道であり、無批判的な渴仰であり、知識的な宗教にしか過ぎなかつた。切れば血の出る信仰でなく、吐の底から如來様のお呼び聲が聞えて來て居るのでなく、豊の早耳で、一度だけ聞いたような空耳であつたのです。爰に眞劍に、誰にも語らぬが、内に深く決心するところあつて、自發的に、生命を賭けての突貫進撃が始められたのです。晝夜兼行、深夜業の連續斷行です。そんな事を云へばお釋迦きまでも勸苦六年の求道行は水に流して、三十歳の十二月白紙に還つて始めからやり直されたのです。それまでは人に頼つて人に教えられて、教えられた儘のやり方で満足して居たのが、内に機熟して、もうそれだけで保ち得ずして自ら獨創的自立の世界を目指して敢然突撃せられたのです。

そして東天、明けの明星の一點煌くのを見ると共に、自己の内からも如來心の輝きを見出されたのです。天地に充つる榮光、眞理と共に、其の大自然法は、同時に自己の内に入つて、自己の内からも燦然として廓然無聖、菩提心が活動して居る。外に在る規範と、内に在る至善とが一致して、如來様の御慈悲と、その大慈悲にまかせて救はれて行ける自己の満足とが一味して、如來の招喚が内に在り内から發遣する南無阿彌陀佛の一聲は、自分の聲であつて自分の聲でない、如來のみ聲である。明かに自分は如來で出來て居り、如來が自分のような形にもなつて居て下さる。刻々自己の内から往生し本願を實行し、淨土を建立して行つて下さる如來力を如實に感ぜず

に居れぬ。

これは私一人にのみ行はれて居る事ではなくて、萬人萬有に不休に無窮に無間に行はれてゐる大慈悲行であつて、今から直ちに、天地萬物が其心持になつて、其「生命道」にいそしまねばならぬ。花は紅、柳は綠、鳥はカア／＼、雀はチュウ／＼、餅は餅屋、魚屋は魚屋で皆、如來の本分を實行せねばならぬ。一生懸命働いても儲らぬとか、喰つて行けぬとか云うが、そんな量見ではなく、自分が骨折つて此の世へ産れて來たのでないから、今直ぐ死んだところで、何も一文も損になつて居らぬ、不足は無い筈だから、何も不平も心配も要らぬ。念佛上人はいつも

「こげな奴は、病氣になつたら、山の中へ逃げ込むばかりだ、心配はいらぬ——」

と云つて居られた。山へ逃げ込んで野垂死にや、養生代もいらぬ、葬式も法事もいらぬ。そして死骸が獸に食われ、木の根、花の根の肥やしになつたらいと、山の中で千日の行をした體驗から、いつも笑つて居られた。煙突の上でハンストをやつたら警察の御厄介にもなるが、山の中で獨り隠れて餓死したら、野鼠の餌にでもなつてやれると云う大悲心からの安心です。其れ位の決心だけは誰でも持つて居りたい、すれば大學を出て一萬圓の月給にならなくとも、三年や五年は持ち耐れそなたなものです。それを工員で入つても、其日から革のカバンで、哺へタバコ、レインコートで電車とバスばかり

りで通勤するつもりになつてゐるから「喰つて行けぬ」です。正直者は馬鹿を見ると云うて、バチンコばかりやつて居る、これでは馬鹿を見て居る者は他の正直者の事で、自らは馬鹿を見て居らぬ機巧な損をして居らぬ「不正直者」にいつか知らんなつて了つて居るのです。

淨土は、先づ自分自身が一番馬鹿を見ても人の爲めになれることです。云ひ換へりや儲けぬ事だ、損スル事だ、いくら損するつもりでやつて居ても儲けて居らぬ事は無いのだから、余程「自滅」する處まで行つても、如來様は殺しはなさらぬ。却つて「身を捨て、こそ浮ぶ瀬もあり」です。一寸、口だけで見舞に寄つたら、後でお禮に贈物をせられて困つたり。損して處分するつもりで困つて居られる物を少々引受けて上げたら、後で儲けてウンと御禮せられて驚いたり世の中には、儲けようとする者が段々損をして、儲けまいとする時は妙に儲かる皮肉の方が多い。

卸や小賣で、五分や一割儲けるのは當然なことで「儲かつた」のでは無い。商賣に「儲け」は附きもので、罪惡ではない。二割儲けても儲けていゝ時はドン／＼儲けよ、遠慮することは無い。同じ帽子でも初めの一打や二打では、五割五分儲けても、仕舞ひのネキ物では損して賣るのが常識です。そしてソレは商法の定石で、宗教的にも當然の事です、ソレは「儲けた」のであつて、「儲かつた」のではない儲けに手落ちの無い程度の商人は多いが、徳で「儲かる」商賣

をスル商人は渺い。儲けよう／＼の商人に儲けの上手な商人で、「儲かる」ところまで、まだ行つて居らぬ商人です。

人間は商人に限らず、一代に一度は「儲かる」時がある。それは一番徳の盈ちた時で、儲けた富は減るが、儲かつた富は、徳が徳を生む、益々面白い位儲かる。「他力で——」儲かると云うのです。所謂商賣での第二の求道に出たのです。

儲けるだけ得だ、儲けなければ損だと云う「儲け主義」の我利我利亡者が、一轉して儲けようとせぬのに、やり方が合理的になり、商賣精神が誠實本位に變つて目醒めたから、樂でズン／＼成績を上げ、人から愛せられ、尊敬せられて、知らぬ間に儲つて居る。全く「お恵み」であり、不思議であります。此の品は悪くて、此の品は良くて、コレはこれだけ儲けて居り、コレは儲けて居りませぬと、自分でも馬鹿らしい程打ち開けて素人商賣をして居るのに、それが儲かつて仕様が無い、儲かるようになるとこんなものかと、全くあきれて居ります。

こんなに「易行易修」なら、早くからやればよかつたのと思うが、これが矢張り人間が死に更つて、根本から出直し、生れ更つて居らねば小手細工では眞似の出来ぬ事です。だから矢張り求道して「法」の御徳を頂なたお陰かなアと思つてます。

現代の短歌 (4)

五島美代子について

私はラクトーゲンで育ち早く母と生き別れた爲か、母としての立場にたたれてうたわれた歌には無條件に心服する癖があるそうである。この「風」を通讀してもやはり

○子によする切なき愛も吾子が言ふ自己陶醉に過ぎざりし吾か

○母われと一夜眠りてききたき事ありとひそかに娘のいひに來し①

○戀人のごとく責めあひて母と子はずひに靜かに手つないで寝る②

○松うごく風見てあればまさやかにそこに生けりと吾子を思へり

○いたましき顔しませりと見てあれば夫と同じことをわがかほにいふ

○白百合の花びら蒼み昏れゆけば拾ひ残せし骨ある如し

○物言はぬ子をかき抱きにはかにも時の流れの遠のくきこゆ

○おほひかぶさる如くわが顔に重なり來て思はぬことば子は言ひ放つ③

等の母の歌に胸をうたれた。ひとみさんいずみさんと一緒に生活なさつておつた頃は幸福に酔つていらつしやつたのであらう。「この幸いつまで續くとつぶやけば子を嫁がすを惜しむに似たり」と歌われておるのをみてもわかるが、しかし美代子先生は普通の母とはちがつてあくまでも理智的でいらつしやる。それは①②③の歌からもよくわかるのである。よく評者は正しく國文學を理解しそれに西歐のポーズを入れる事が大切だと云う。口で言えば簡單だがなかなか出来るものではない。この評者の言を一番端的に實踐されているのが美代子先生ではあるまいか。ここにあげた歌はひとみさん(舊東大英文科學生)をなくされた節の歌である。挽歌位に難しいものはない。「死に近き母に添寝のしんしんと遠田のかはづ天に聞ゆる」のど赤き玄鳥ふたつ屋梁にゐて足乳根の母は死にたまふなり」の齋藤茂吉の歌を御夫君の茂先生がよく「この歌は母をうしなつた時すぐ作つたものではない。相當時間がたつてから作つたものだ。時間がたつても歌聖茂吉だつたからかくまで表現出來たのだと云われる。挽歌をすぐ身内の者が作ると平凡になつてしまう。一體人間は悲喜の極點においては平凡になつてしまふらしい。

ところでここにあげた挽歌であるが、技巧など目につかず母の氣持を如實に表現している。これはやはり世人の如くただ悲歎にくれてはいられなかつた爲によるのもあらうか。變な言い方かも知れぬが二十年愛しつづけた實體、それをうしなつてはじめてこの實體の眞を掴んだのである。そこにこの實體を作品として結晶させなくてはという藝術欲に燃えられたのである。いくら燃えてもやはり本來の母性愛は隠す事は出來なかつたとでもみるべきなのだらうか。

堀之内へしばしばお邪魔した節は御病氣がちだつたので「ひとみさん」をうしなわれてからどうであらうかと氣になつたのであつたが、歌壇での御活躍、明治記念館席上の御姿から私の心配も徒勞であつたとよろこんでいる次第である。次女いずみさんとの生活を如何に歌に作られていくかを「風」以後の課題として私はたのしみに行っている。

(追記) この文は母としての歌集「風」と云う題で昭和二十六年十二月十二日に書かされたものである。三月・四月・五月と學窓多忙の爲、稿をあらためる時間を持たぬので舊作をそのままに轉載する。五島美代子氏は女流歌人として一方の雄である。(上木堯葉)

宗門學校探訪

京都 家政學園

山紫水明の地、こゝ東山、仁王門にある家

政學園は、すぐ近くにある平安神宮前の静かな清い疏水の流れの如く清々しく、美しい。

コンクリートの四階建を中心として、立ち並ぶ校舎や、木々の緑を四圍に持つ運動場等戦火を受けた都市では見られぬ雰圍氣は、京都人の、あの柔かな物腰と共に、言ひ知れぬ懐しみを感ぜずにはいられない。

何時か訪れた時より遙かに活氣を帯びているこの學園は、今新らしく幼稚園を併設して隆々と發展している。「學園案内」をかりて、しばらくその概要を訪ねてみよう。

○

本學園は明治三十八年の創立にして卒業生を世に送り出すこと、既に八千名に及んであ

前身であります。

爾來この「家庭人としてのよき女性」の教育は信者の希念するところ市民の期待するところと一致して生徒の数は年々に増加し、校舎の狹隘を感じて、大正五年には四條寺町下る大雲院境内に新築移轉して社會の要望に答えることとなりました。殊に大島徹水上人は此間校長として女子教育に専心し「質實」「貞淑」「實用」の三點を強調して、眞の日本女性性の歩むべき途を、身を以て指導せられ、校風益々隆んとなり、中京隨一の學校として、私學の重きをなすに至りました。

而して昭和六年には更に再び校舎の狹隘を感じて東山景勝の地、交通至便の現在の所に移轉擴張して家庭科の充實を計り、大いに吾

國の女子教育に盡してまいりました。

その後支那事變から第二次世界大戰と吾國歴史上の大變改にあい、殊に戦後は米國の指導のもとに、吾國教育機構の大改革を受けましたが、本校の特色であるところの「質實」はこの物資不足の吾國の再興のためには不可缺の徳目であり、又「貞淑」はいついかなる世にも人間として殊に女性としてその本質的價值をなすものであり、更に又新教育の社會に役立つ有用なる人間の養成には「實用」主義の教育こそ、その主流をなすものであることを思います時、本校は終始一貫、眞の女性教育に盡してまいりまして、現在にあつては深く各家庭に於て、又廣く社會に於て、その美しい結果を結んで來ましたことはまことに歡喜に堪えないものがあります。

○

三枝樹正道校長先生は、人も知る教育界の第一人者である。その學識と共に、溫厚なる人徳は、本校の大黒柱にふさはしい。

何時も青年の様な活氣が、眼鏡を通してにこやかに記者に傳はつて來る。

「校訓としてはね

歸依佛——謙虛にして眞理探求

歸依法——誠實にして精進努力

歸依僧 親切にして相互協同

でしてね」

と紙片に書いて渡される。

「これを更に實踐する運動として、『三せい運動』と言うのをやります。清潔、整頓、靜肅と言う三つです」

この所、仲々教育家らしいモットーの立てかたである。女子教育にはもつてつけのこの先生の話に、多分美貌の京美人達が、ほろりとして耳を傾ける事であろう。

現在幼稚園一八〇人、中學三〇〇、高校六〇〇と言ふ大世帯の頭主であるが、この側近として、鶴飼光順、高橋良和氏の如きその筋のエキスパートが、縦横に活躍している。

○ 「佛教行事は……」

等と聞くのがおこがましい程この學校は完全にミッションスクールの本領を發揮している中でも異色なのは卒業生全員に爲される「授戒」であらう。夏休みを利用して早朝五時登校、校長自ら戒師となつて佛事を終へ、朝食を一同共にして散會すると言う。

「父兄達も参加を希望して來ます。勿論一緒にやらせます。この授戒がある爲に、特に本校に入學したいと言う人もあるんだよ、君」

全く、京都ならではの見られぬ風景の一つかも知れない。

毎月二十五日には、一同揃つて知恩院祖廟に參拜する。これは佛教大學、東山、華頂兩學園、尼衆校等全員合同であり、佛都らしい學園のあり方である。

こゝでは音楽法要をいとなむもので、聖歌隊を組織し、各校々長が輪番導師をつとめ、誠に莊嚴なものだそうである。このことを修する生徒達の思惑がどの様であつても、「朱に交はれば赤くなる」とかの諺のように、必ずや、宗教情操は、こよなく養はれて行く事であらう。

○

毎週水曜には、全員講堂に集合して禮拜を爲し、續いて校長先生の佛教講座がある。

「六波羅蜜とか、八正道とかをね、出来るだけ易しく、しかも、何と言ふかね、まあ、婦徳の養成に役立つ様に説いてやつているんだがね」

記者も、かつてこの先生の講義を聞いたことがある。教授法と言へば、まことにつまらぬ筈であるが、御世辭をぬきにしても、確かに先生の話は興味があつた。昔變らぬこの先生の口から、同じ様に多くの女生徒達の腦に

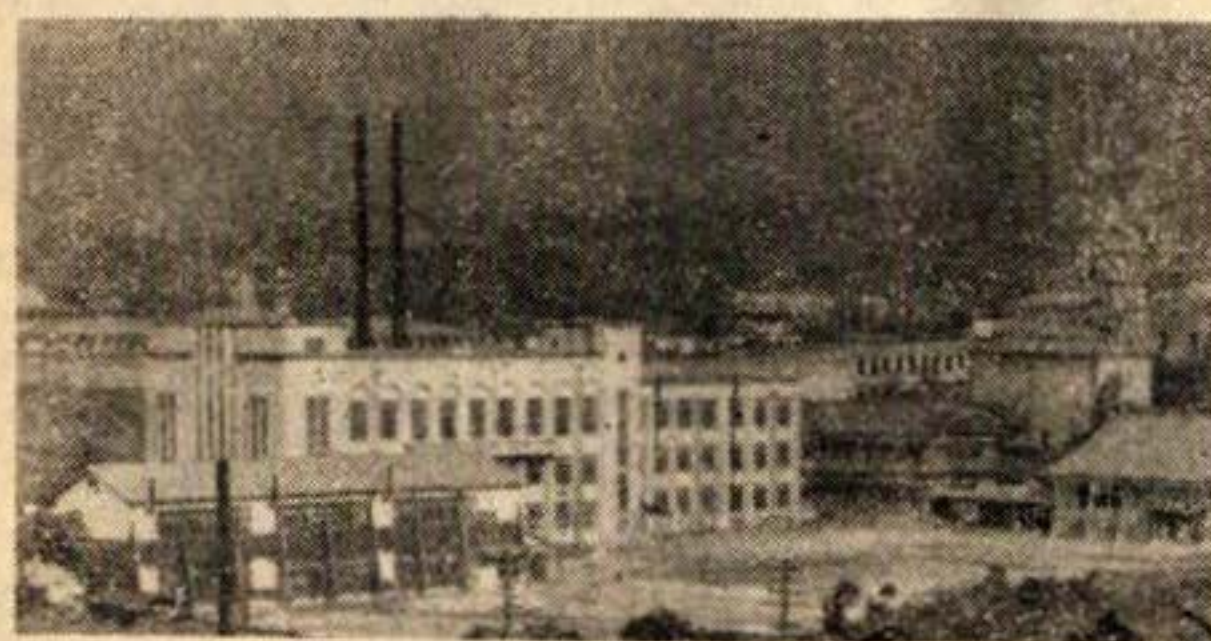
そのいぶきが流れているのであらう。

話の時々、新式ハイヤーが出入する。

「あれは何ですか」

「幼稚園の子供を送つていふのだよ。千本の方からでも來られるからね」

全く驚いたものだ。ぜい澤と言へばそれまでだが、手の行きとどいた事である。子供達の幸福感が目に見えるようだ。(Y)



家政學園全景



話 童

お 池 の お 念 佛

森

正

義

ある山寺の境内に、小さな お池が ありました。この頃は 雨が 降らないのでところどころに どり が見えていました。

うき草の まつ白な花が ほんのりと咲いていました。この池に 小さな ケロ吉という一匹の雨がえるが住んでいました。朝早くから本堂で、カーンカーンとさえた きの 音がすると

「がなが しんじよう によ こうろう」

と 和尚さまの おつとめの聲が聞えてきます。ケロ吉はこの さわやかな聲をきくのが 大好きでした。青い洋服を着て水蓮の葉っぱの上に 両手をついて、しづかにしづかにこの和尚さまの聲に きき入っていると、ケロ吉は みほとけさまの やさしい お聲を聞いているように思えてくるの

でありました。あめんぼう や 水すましがくると 池の中を せわしく泳いでいるときでも、この雨がえる は ジーツと、和尚さまのお經の聲に聞き入っていました。

「なーむ あーみ だぶ

なーむ あ み だぶ

なあむ あみ だぶ

ケロ吉は この 「な む あ み だぶ」の聲

が また たまらなく 好きでありました。お腹の底にまでしみとおつて みほとけさまの きよらかな はす池で あそんでいるような うつとりとした氣持に なるのでありました。ケロ吉は「ふーつ」と朝の大氣を おなか一ぱいにすいこむと 和尚さまの 聲に合わせて

「なーむ あーみ だぶ」

と言つて見ました。だけど 自分の耳に入つてくるのは
ただ

「ケロロ ケロロ キヤロ」

という聲だけでありました。

そこで、まつ白な うきぐさの花に 聞いて見ました。

「うきぐささん。僕の聲 どうして ケロロケロロキヤロ

としか 云えないんでしょうね。」

うきぐさの花は しづかに 風にゆられながら首をふつて
もうしました。

「いいえ。ケロ吉さん。あなたの お聲は、みほとけさま
をたたえる りつばな、お聲なのですよ。あなたがね、一生
懸命に みほとけさま を思つて おしようさまの お聲に

合わせて『な む あ み だ ぶ つ』と言つてらつしや
るのを、ホーラね、空の雲さんが あんなに下つて来て一
生けんめい に 聞いていらつしやるじや ありませんか。

今頃は おひやくしようさんたちが、雨が降らないと 田植
が出来ないと言つて、とても雨を ほしがっているんです

よ。あなたが いい聲で「な む あ み だ ぶ つ」と

みほとけさま の お名前を 呼んでいるので ほーら 雨

雲さんが あんなに、近づいて来たでしょう。」

ケロ吉は 空を 見上げました。大好きな 雨が ポツリ

ポツリ と 頭の上に 落ちて来ました。

「やー 雨だ 雨だ。みほとけさまが 雨を下さつた。

ガツ ガツ ガツ ガ ケロロ ケロロ

な む あ み だ ぶ つ

な む あ み だ ぶ つ

ケロ吉が よろこんで、大きな 聲を はり上げて お念
佛を申しますと、本堂から ボク ボク ボク ボク ボク

と、木魚の音が、ケロ吉のお念佛に合せるかのように 聞
えて来て、銀色の雨つぶが、池一ぱいに 降りそそいでまい
りました。池の鯉も ふなも どじょうも ケロ吉の聲
に合わせて

「な む あ み だ ぶ つ」

と おとなえしました。

ケロ吉にも和尚さまにも おさかなたちの お念佛は 聞
えませんでした。みほとけさま だけは ほんとうに う
れしそうに しづかに ほほえんで聞いていらつしやいまし
た。

(一九五三・四・一二)

作者紹介

所 属 児童文學者協會・日本童話會

朝日児童文化の會委員

關西童話會主宰・佛教文化會副會長

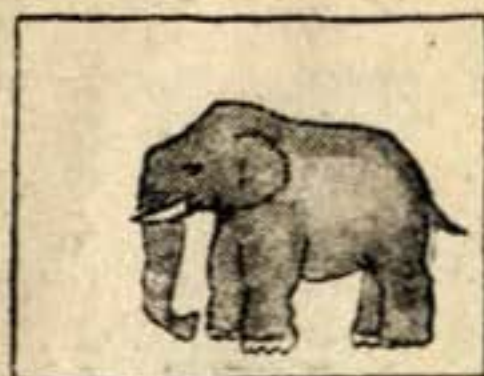
主なる作品 白い花・山と海と町・鳩のおつかい その他

*

*

*

*



新興宗教訪問記

編 集 部

新日本宗教團體連合會本部

新興宗教は、戦後の現象の一つとして、社會生活の中に大きくクローズアップされて來た。そして天理教・大本教(愛善苑)、金光教の如きは、最早や既成宗教の域にと入りつゝある。

しかしこれ等を含む多くの新興宗教には、尙多くの問題を藏している。われわれは、單に憶測だけの皮相な見解からのみこれ等を云々してはいけない。事實に即して、歴史的事實を厳正に考へなければならぬ。

編輯部はこの意味で、各宗教の訪問を爲しその實相を讀者に送る事とした。

小ザッパリした本部は澁谷區初台にある。それは既成宗教に對待する新興諸宗教の元締であり、連絡所でもある。理事の方に御會ひして種々その説明を聞いてみた。

「どの位所屬宗派がありますか」

「そうですね。現在文部省の認可を受け、連盟に屬しているのは一四九です。信徒の數ですか。まず五百萬位ですかね。勿論日々激増はしていますかね」

仲々大したものである。その數の確實性よりも、それ程多く信徒がいると言ふ現實相を

見逃してはならない。

「兎角世の中では、例へば『蛇と鳩』の映畫の様に、極く一面の事實を誇大して悪く宣傳してはいますがね、皮相な見解ですよ。この機會に、われわれ連盟に屬している宗派の實相を見て頂く事ですね。

新聞や、ラジオや映畫でこの頃盛に取りあげてはいますがね、一方的ですね。勿論、これ程結構な宣傳はありませんし、又この頃ではいくらか正しく見る様にはなつて來ましたがね。」

この様に説明せられる理事は、如何なる宗派にも屬せず、所謂超宗派的なのだそうである。しかし彼等は、こうした諸宗教の現實に必要な所以を力説する。そして柔い物腰で、既成宗教の無能ふりを攻撃される。

話を轉じて政治と宗教の事にふれてみる。

「全然關係はありません。勿論、今日の政治は墮落していますよ。ですから、若し吾々に野心があるなら、日本の政治も左右出來ますがね。何せ、數百萬の信徒を持つているのですから。」

正に、驚くべき現實である。訪問の折は選舉戦の頃であつた。しかし、結果に於ては宗教界代表は、既成も、新興も、殆んど全滅

であつた。この事は、政治と宗教の問題として、別考さるべき事であらう。

「他に所屬せぬ新興宗教もありませうね」

「勿論あります。殆んど同數位もあるのでないでせうか。大小とりまぜると」

「なぜ、これ等を抱含しないのですか。例へば靈友會も入つていない様ですが」

「其處には、まだ時期尙早な理由もあるのです。てね。しかし、新興宗教にも、怪しげなものもある様です。こうしたものは、本連盟には屬していません。認めないのです」

「そうした宗教も、一寸訪問したいのですが、教えて頂けませんか」

「それは私達の機關を通じては御紹介は出来ません」

この事については、何故か口を閉して開き出し得なかつた。唯所屬する宗派の名簿を、悪用しない條件で頂いて、これを頼りに、二三訪問してみることにした。

立正交成會

(但しこの名簿が選舉中だと、一冊、十萬圓で賣れるということである。恐るべきかな)

々の建築物は、本部、集會所、病院等、誠に豪壯なものである。

老若男女(この言葉はまことにふさわしい)が續々とつめかけて来る。皆首に數珠を付けている。何か祭りでもあるのかと信者に尋ねた所、何時でもこうだと言う。祭りの時等物凄いの、道も一方交通で還狀式になつてゐる。

本部のある二つの門には、歩哨の様に二人の信者が立つてゐる。入門する信者は、この二人に合掌して中に入る。一寸怪しい時には誰何する。不信の者は入るべからざる所の様である。

本部にて理事長長沼基之氏にあれこれと質問してみた。信徒の總數は十五萬世帯、五十萬人であると言う。一日に平均二百四五十人新入信者があると言うから驚くべきものである。

「どの様な動機から入つて來られるでせうか」

「色々ありますね。家庭の苦しみとか、個人的な精神的、肉體的問題とか。しかし、本來この教は、そうしたもののから始まつたのでなく、やはり日蓮上人の教へから出發しています」

同じく日蓮上人から出て居ても、日蓮宗とは何の關係もないそうである。こゝに新興宗教の特質の一つがあるのであらうが、同系の靈友會とも没交渉なのだそうである。

團參は、主に日蓮上人の靈跡を廻るとの事で、三四枚ものプリントに、ぎつしりその日程表が組まれていた。臨時列車をしたてゝこの團參では、鐵道省も、相手の本山も、大いに有難く施しを得て居る次第で、正に交正會様々と言ふ所であらう。

「經濟的なものはどの様に」

「一世帯月十圓づゝ頂いて居ります。この外、特別これと言つて頂いてはいません。集つた金は、會の運営や、厚生施設にあてゝいます。」

大衆の力は恐ろしいもので、これ程までに施設を充實すると、最早や宗教團體と言うより、社會事業團體の様である。宗教は亡びても、この社會施設は、それだけで獨立し得る能力を持つてゐることであらう。

○

構内を案内してもらふ。遊園地(これも構内の一施設)を通つて大集會場に行く。大講堂である。正面には一段高く舞臺様のものがあり、佛殿になり、その前に百疊敷程もの廣

間がある。その中に信者が、各地区毎に圓座して盛に語りあつてゐる。その聲の響きは、大爆竹の音を聞いている様でもある。これと同じ状態は、この講堂の二階にもある。

毎旦朝九時より、午後三時迄集つた信者が互に信仰談義を交している。耳を傾けると自分はどうしてこれを信仰し、そのお蔭でどんなに今楽しく暮しているかを語つてゐる。聞く者も眞剣である。

一人の若い女性を捉へてインタビューしてみた。

「どんな動機でいられましたか」

「私は、つい二三日前まで信仰などありませんでした。私の母は長の病で寝ています。食物が咽喉を通らないのです。所が一昨日、交成會の花まつりのお供物を頂いて、少し母に食べさせたら、とたんに咽喉を通る様になりました。近所の叔母さんが、これは佛のお力だと種々説明して下さいました。私もそれ以來有り難いと思つてこうしてお詣りしているのです」

と述べて、數珠をすり／＼疊に頭をつけて拜んでいた。靈驗あらたかと言へば、これ程の現世利益はない。

若い男の信者に聞いてみる。

「入信の動機は」

「私は小さい時から父親の言ふ事等聞きませんでした。事毎に反抗しつゞけたのです。人生にも苦しみ、色々なものを讀みましたがどうする事も出来ませんでした。ふとした機會でこれに入つたわけですが、……」

「父に反抗したのは何故ですか」

「非常に封建的なのです。子供の言ふ事等耳をかさないのです。然し、やはりこの信仰に入りますと、徒らに父に反抗する事は私の精神に反するのです。それはいけない事です」

「それでは、貴方は、封建性に屈したと言ふ事になるのですね。この信仰は、そう言う事を教えるのですか」

「いや、その所はですね、封建性とか近代性とか言ふことは、別として、家の和を亂す様な事自體がこの信仰に反するのです。それはこの信仰に入つてみれば分りますよ。」

この頃のジャーナリストは、何も知らないで、何か迷信だとか、邪信だとか言ひますが駄目ですよ」

話はとんだ所まで飛躍してしまつた。そしてわれ／＼記者の無能を攻撃された。一途に信するこの青年を、これ以上迷はす事は、何

と言つても罪の様な氣がするが……。

三時のベルがなつた。今までガヤ／＼騒がしかつた一堂が、急に靜寂に歸る。一同佛殿に向つて合掌する。やがて導師らしき人々が壇上にあらはれ、太鼓の音も勇ましく題目が唱へられる。一、二階から響いて來るこの合唱は、構内を異様に震はす。

老も、若きも、一樣に夢中に唱へるこの姿を見た記者は、何か良心の呵責の様なものさへ感じたのであるが、こうした現實相は、社會と隔離された様な世界で、毎日行はれてゐるのである。

天真道教

一萬余の信徒と言うこの教團の本部は、稍チャーチ風な清洒な建物である。内部は神道式本堂である。

こゝの信徒は集つてゐるのは二十人余であるが、大分交成會とは趣が異つて紳士淑女が多い。夕六時、チャーチ式な塔から鐘の音がガン／＼と鳴り渡る。茶を呑んで雜談していた教主も信者も、忽ち合掌（稍、眞言の印相にも似ている）して默想する。記者は思はずかたずを呑んだ。

やがて禮拜が始まる。教主は壇上に座し、

信者は、廣間(四十疊程)に行儀よくならぶ。

先ず深呼吸である。始めは浅く、だん／＼深くなる。静寂を破つて、鼻の呼吸が、大きな波を打つ。一種異様な靈威氣が漂よう。やがて太鼓がドン／＼鳴る。これに合せて「……天神」と神の名を呼びながら、前で組んだ手を、太鼓にあはせて下腹を強く打つ。

傍からみていると、腹を痛めはせぬかと思ふ程である。

腹を打つ事四、五十回、續いて默想が始まる。一種の静座である。この所までは、精神修練道場に居る様な感じである。

忽ち、静寂の中から、教主の御詠歌にも似た禮讃文が始まる。合掌している信者の手が上下左右にゆれる。靈が遷つたのである。

その女性を撫し始める。始めは頭、次に胸、腹、尻、股、あらゆる所をさすり廻る。相手の女は、又狂つた様に手を上下、左右に動かしている。二人の荒い呼吸が、廣間一體に流れる。靈が部屋中を駆け廻っているかの様である。雞毛だつ程の冷寒を記者は感じた。何時しか、教主の聲も低く消えて、信者も又平靜にもどつて行つた。

○ 「あなたは、動き廻つた事を知っていますか」

「よく知っています。しかし、それは神の指圖によつたのです。神が、あちらに行け、こちらに行け、この人をさすれと事毎に指圖しました。唯私はその命に従つただけです。ですから、誰をさすつたかは知りません。第一、こんなに人が居る中を、目を閉じて歩き廻っているのに、ぶつからぬのが不思議です。神の導きだからです。」

まだ靈が抜け切らぬ様な興奮で、彼女は語りつづけた。さすられた女性に、

「あなたは、さすられた事知っていますか」
「よく知っています。然し、神がさすつてもらへと教へました。その命に従つたまひです。私は少し病身ですが、さすつてもらつて



(立正交成會全景)

いる間は、とても氣持ちよかったです。こんなに靈が移つたのは初めてです」

「今はどんなですか」

「やはり、元に歸つて、少し身體がだるい様です。明日、明後日と、祈りを重ねれば、きつと身體もよくなると思つています」

この人の場合は、やはり病人であり、入信の動機もそこにある様だ。

祭壇には、「御力石」とか言ふのがあり、教主が修業中、神よりさずかつたものとか言う。この石は、不思議と、病氣や、罪のある人の前では、重くなると言う。

「經濟的基礎は、どこにありますか」

「お力袋と言つて、信者に渡します。應分の布施を神に捧げるものです。勿論、唯今は信徒數も少ないので、仲々困難な所があります。」

元來、こゝでは、陶枕とか言つて、陶器製の枕を廣く賣つてゐる。彌徳陶枕とか言つてよく見かけるが、こゝの堂のガラス張りの中にも、それが陳列してあつた。

教主の曰く、

「世の中は變轉極まりないものです。それは、人知、人力を超越しています。人間は長い間、戦ひつゞけて來ました。この戦ひは、

止む事ありません。大東亞戦争も、その一つです。然し、神の導きは、この戦ひを通じて、一步步完全な世界形成に進めてゐるのです。人間は、この神の導きのまゝに進まねばなりません」

ヘーゲルの様な理論を、語りつゞける教主の教への中には、人間は、唯大自然のまゝに服す事のみがある様な氣もするが、然し、教主は、そのみが人間でないと言ふ。その中にあつて、ともかく、何事にも動ぜざる人間完成が必要であると言う。總ての祈禱も、又こゝに通じて行く様である。

神祕道不思議教

鷲宮の奥深い中に、二階造りのしもた屋がある。これがその本部である。五十前後の教主は和服姿で應接間にあらはれて來た。どうみても、宗教々團らしい空氣が無く、聊か氣抜けがする程である。

所が裏の部屋に通されてみると驚いた。八疊二間をくりぬいた様な部屋一杯が、金銀まばゆい本堂である。正面の佛像と言ひ、四圍の調度と言ひ、すべて眞言寺院と變りがない飾りつけ。いや、下手な寺院より、遙に立派な、飾りつけである。

「金十萬圓」「金一萬圓」と言う寄附の貼紙が、たくさんある。

「私は元來醫者の子でしてね。代々醫者なのです。今でも一統は殆んど醫者でしてね。

しかし、私は小さい時から宗教がすきでした。そして、終に親の反對を押し切つて今の高野山大學に行きました。その上、これに満足せず、同志社大學にも行き、或は禪寺にも入り、更には哲學書を読みあさりました。然し終に何も得る事が出ませんでした。この頃になつて、漸く、人生の何たるかが分る様になつたのです」

その何たるかに就いては、長々と聞いた話からは、終に何も聞き得なかつた。今は無職だそうであるが、二三大きな藥品會社の顧問として生活をしてゐると言う。

信者は極く僅かであるが、それでも一萬ばかり居るらしい。

靈驗あらたかな本尊秘佛は、信者の中心である。難しい教よりも、この佛を念ずる事が遙かに功德があると言う。

「實際功德がありますよ。金が欲しければ念すれば必ず叶へられます」とは、信者の言。

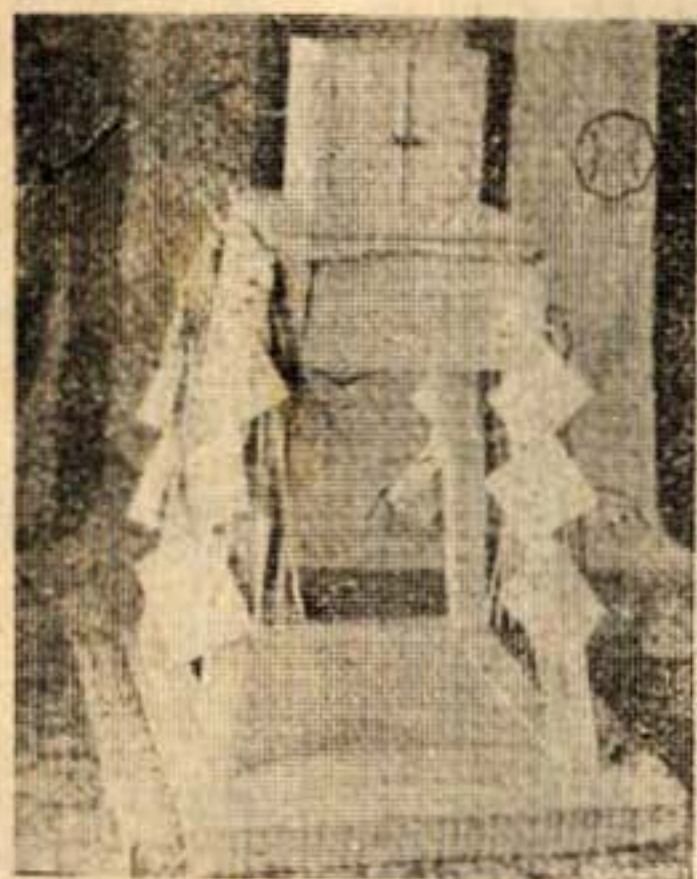
經濟的基礎は、寄附のみである。

「十圓、二十圓等私のタバコ錢にもなりません。そんなものもらつたとて、何の足しにもなりませんよ。私は私で生活していますし。勿論寄附して、佛に捧げるなら、全財産を捧げるべきです。眞剣になれば、何事も通じますよ。」

信する者は強いのだと言う事を力説する教主は、こうした記者の訪問を大變歡迎している様であつた。

PL 教團

澁谷の豪壯な本部は、元「人の道」と言ふ名で知られた新興教團である。戦後脱皮したこの教團は Perfect Liberty (完全なる自



お力石 (天真道教)

由)と云う名から PL としたものである。

ホール(こゝではダンスが華々しく行われる事で有名)では、今夕七時から感謝祭があると云ふので暫らく待つ事とした。

廣いホールには、近代的なイルミネーションの光が、晝光色をはなつてゐる。天井の花飾りは、クリスマスイブの様な氣さへする。續々とつめかけてくる信者は禮装である。正面に向つて、PL 禮拜と云う一種變つた禮拜をする。頭上で兩手の親指と人さし指で圓を書き、それを下に降して頭をさげる。

「人がくよくよしている時には、兩手を頭等へやつていられません。やはり、前で組んで、くよくよするものです。變つた教團ですから、變つた禮拜法を考へたのです」

とは、支部長の説明である。

正七時ともなると、堂中は一杯になる。入つて来る人に對して「お歸りなさい」と言う。不思議に思つて聞いてみると、「教會は各人の家であるからだ」と言う。子供達(PL 寮に居る)が二百人程いて、その中の一部が聖歌隊として、上面左、ピアノの側に並ぶ。司會者の會圖で教主達が入つて来る。黒いガウンに白い胸着のこの風貌は、カトリックの牧師や尼僧達を思はせる。

禮拜、讃歌、祈禱、これ等も又、教會の日曜禮拜の様な空氣がある。聖歌隊の合唱が、PL 禮拜の前後に、高く低く流れて来る。いとも莊嚴なものである。

「ダンスを大いにやられるそうですが」「そうですね。邪念のないこの踊りの中に神の教を受けて行くとても申したらよいでせう。勿論、これは行事のほんの一部でしかありませんが」

ダンスの教師も本職が、四人居り、信者達に教へてくれるのである。

正面壇前には、箱や袋が山とつまれる。寶生袋とか言つて、信者の心からなる寄附である。そして、これがこの教團の經濟的基礎になつてゐる。

この教團の特殊行事は朝詣りである。早朝集合して、朝の禮拜を爲し、終つて、三、四人が壇上にて、二三分宛體験談をする。これを聞きながら、信者達は自己の反省と信仰の向上をはかるのである。

「信者中には既成教團の人が殆んどなのでせうが、それとの關係は」

「自由です。そのまゝでいたい人はそのまま、出てしまいたい人は出てしまふ。これ信者の自由にまかせます。葬式も頼まれれば

するのですが。

とにかく人生は藝術です。何事もこの中に人間の完成を求めて行きます。

あらゆる教へを取り入れていますが、別にどれに依つたと言うものではないのです。」

「何か、現世利益でも」

「別にありませんよ。只、信者が、何か質問をして來るときは、それに答へて教主が紙に書いて渡します。その中には、病氣の事や経済的なこともあります。その通りやれば必ず、神の恵みもあるものです。」

「佛教等はどうですか」

「そうですね。駄目ですね。特に禪寺で悟つた等と言いますがね、あれは悟りそこないですよ」

○

正に雲集する信者を前にこれ等新興教團の教主や、理事達は、誰しも口を揃へて既成教團の無能性を叫ぶ。これ等教團の教理は、聞けば簡単であるが、聞けば聞く程難しくもなつて來る。こうした教團に屬する多くの信者が、混迷期の世相の中で、少くも彼等なりの平和と安全と幸福を求めている。果して、この中に眞の平和と、幸福とがあるであらうか。これは、讀者に考へて頂く事としよう。

新興宗教錄音ルポ

高 瀬 廣 居

(N・H・K社會部、企画係)

「迷える羊」と題した新興宗教の放送は、既成教團では、眞宗、淨土宗、新興宗教では立正交成會、靈友會、神秘道不思議教、生長の家、PL教團、天眞道などの現狀を錄音する外、竹中信常師の聲も出し、その後で宮城普彌教授の解説も送りました。とりあげ方については、決して批判的に取り扱はず、ありのままの姿を紹介し、宮城教授の話も、社會診斷の社會時評としてでなく、氏本來の心理學者として、なぜ人間は宗教に頼らざるを得ないかと言う點から、現實の問題として解説してもらいました。

大體日本人は、神棚と佛壇を一しよに家でまつり、このごろではこれに新興宗教の祭壇さえ設けている有様です。これは、日本人の和服と洋服の二重性なども通ずるもので、日本人の跋行性を示していると思います。こういう心理的な盲點を、ついてみたいと思つたのがこのねらいでありました。

なお、婦人は宗教的暗示にかゝり易いと言はれ、そのせいか既成、新興の宗教ともに、婦人の信徒が極めて多く、こんど見て廻つた範圍でもほとんどが家庭の婦人や、お婆さんばかりでした。

こうした放送は、内容の地味なだけに、その興味如何と言う事には、色々難しい點もあつたのですが、現實の深刻な社會斷面として、一特に見逃がすことの出來ぬものであつて、この點、大いに努力して、出来る限り廣く見て廻り、錄音も取つてみました。已に聞かれた方の感想もあること、思いますが、人事としてでなしに、充分考へて頂きたいと思つています。(四月二十七日、婦人の時間放送)

讀者のページ(二)

○戦傷にて陸軍病院で呻吟中、浄土により前途に光明を與へられ今日に到りましたが、島遣いの愚生には近頃の浄土は少々難解、舊誌により再出發中、不覺にも會費切にも不拘、送本感激いたしております。今回の入金で尙不足かも知れませんが除々に入金いたしたく何卒惡しからず(大牟田市役所内 西谷嘉清)

○一枚起請文一部送り下さい。浄土を廣め度く思うが、全部とまで行かずともカナ附きにはなりませんか。女なんかむつかしいのでと云ふのです、出来れば(福井縣今庄 竹澤元治郎)

○初夏の候貴會御一統益々御清榮の段奉賀します。毎號誠にありが度うございます。拙寺信徒是非御誌拜讀し度いとの事、更に二部お送り下さい。貴會の發展を祈ります。合掌(新潟縣岩船町弘願寺 山口源正)

芝園だより

○週間朝日は「立正交正會」や、「少女占い師」を取りあげ、映畫は「蛇と鳩」で新興宗教をとりあげている。何處に、こうした信仰が芽生え、擴がるかと言う事を、心靜かに考えてみたい。新興宗教訪問記も、その一つの試みです。

○京都では、東山高校(藤原弘道)華頂高校(水野隆樹)、家政高校(三枝樹正道)、大阪では上宮高校(小林大巖)の各校を訪問しましたが、いづれ劣らぬ立派な發展と、各校長先生の威氣込みに感服しました。宗門立各校の健在を慶祝いたします。

○高橋良和氏の舞踊研究所も大したものでした。あれだけのものを築かれた努力は徒事ではない事でせう。一寸やそつとの思いつきなどでは、足元にもよれません。

○小林大巖氏は大阪地方參議員選舉で次點とか。三重、上野市長に豊岡益人氏が當選。非喜交々ながら、益々御活躍を願います。

○關西浄土支部連絡員として新保義道氏を依頼しました。大いに編輯にも協力頂ける筈にて、今後を御希待下さい。(安居)

○五月の編輯會議は新緑香る佐藤良智先生宅で開かれた。編輯の抱負を談論する三佐藤先生に竹中先生安居君に小生の面々、それに、藤井實應先生が三河から來られた。清水の中村康隆先生は五日の正大同窓會に上京されたが所用にて缺席、本堂(コンクリート造)、幼稚園新設に活躍のせいか日にやけた元氣な顔。

○幼稚園と云えば山田鏡瑞氏の所でも五月二十日開園。

○來月號より開教區の創業の苦心談を連載して行く豫定、第一回はハワイ。

○七月號に「我町我寺のお盆」という記事を募集しております。切は六月十日に。

○父はおかげと元氣。尙二十五日より三日間放送(龍海)

誌上法律相談

解答者 荻原貴光先生

○刑事、民事何でも法律に關する問題を具體的に書いて質問して下さい。誌上でお答へします。

○發表する質問者名を匿名にするか否かを明示して下さい

誌代 會費半々年二百圓、一年四百圓(十共)。每號定價三十圓千四圓、前金切次第清算通知申上げます。確實便利な振替を利用して下さい。

「浄土」 六月號

昭和十年五月二十日
第三種郵便物認可

昭和廿八年五月廿五日印刷
昭和廿八年六月一日發行

(定價三十圓)

編輯兼 眞野正順
發行人 眞野正順

印刷人 春山治部左衛門

印刷所 共立社印刷所

發行所 法然上人續仰會

東京都千代田區神田保町三ノハ
電話 芝(四三) 一三二八

吉川英治著 安田靫彦裝

親鸞 全三卷

師潤瑩大推
巨匠が畢生の情熱を傾けて、高僧九十年、波瀾と求道の生涯を描く不朽の名品、茲に晴朗高雅の装を得て成る！

函入豪華版

B六上製各四八〇頁
定價各三四〇圓 40

向日書館 東京神田錦町3~14 振替東京75144

浄土宗知恩院

御詠歌レコード集

黒谷和讃 靈場節 月影節 (夏の御歌) 御忌和讃
圓光節 (春の御歌) 明照節 (秋の御歌) 來迎和讃
本願節 清淨節 (冬の御歌) 花まつり和讃

三枚一組 七五〇圓 送一八〇圓

京都市下京區七條大宮西入

申込所 市原榮光堂

振替 大阪 六八六二二番

浄土トラクト

B六、十六頁 價十圓 送八圓
五十部以上 二割引
百部以上 二割引

浄土編集部編

信徒必携

信徒としてぜひ之だけは知っておきたい「浄土」のみおしえ・みほとけのこと・お念佛・信徒のつとめ・其他・佛壇・香・珠數・木魚・おけき・佛式作法一通りを丁寧に説明したもの、

藤井實應著

一枚起請文

宗祖信仰の本質を、新しい思想と深い體驗によつて、かんでくだいて説かれた念佛信仰者必見の書

浄土シリーズ

文庫版四頁二圓 百以上、八圓
三百以上 一、五圓
送、五十部 每八圓

大野法道著

五重の話

本宗入門の式である大切な五重とは何か、何を傳え、どんないみがあるのか。大野博士が特に平易に解説されたもの。五重宣傳のチラシ、又は、授講者施本として大へんよろこばれています。

昭和十年五月廿日第三種郵便物認可(毎月一回一日發行)
昭和二十八年五月廿五日印刷 昭和二十八年六月一日發行

第十九卷

六月號

定價金三拾圓(送料)